

## 内分泌診療における総合的視点と臨床検査の意義：性差に着目して

◎大塚 文男<sup>1)</sup>

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科総合内科学・教授 岡山大学病院・副病院長<sup>1)</sup>

甲状腺や副腎、下垂体や性腺などの疾患を取り扱う内分泌診療は、医療面接と身体診察による情報から総合的に病態を解析する総合診療である。特徴的な症候やホルモン値などの臨床検査に基づいて病態を考察していく過程で、鑑別診断のための総合的・全人的な視点が重要となる。内分泌疾患の症状としては臓器を特定しにくい不定愁訴が多いため、経時的に出現する特徴的な症状をフォローアップすることも診断の助けとなる。全身倦怠感・食欲不振・体重減少・動悸・脱力・浮腫・月経異常などの症状の鑑別には、臓器別アプローチでなく病態診断を主眼とする全身的アプローチを行い、病歴を単に聞くのみでなく、常に鍵となる病歴を聴き出す姿勢で臨むことが大切である。症候や血液生化学あるいは生理検査の異常から責任ホルモンを疑い、各種内分泌試験や画像検査に基づいて科学的に確定診断する。その一方で、測定した各ホルモン値の解釈については、数値から必ずもう一度臨床症状に戻り、ホルモン値を考慮した症候として矛盾ないかを確認し、治療介入の必要性や意義を総合的に判断する。内分泌診療における総合的視点の重要性を、内分泌疾患の性差という点に着目して症例ベースに解説したい。